



株式会社エスアイイー様

講師は全員、現役の IT エンジニア。

CASE STUDY

| | |
|------|---|
| 企業名 | 株式会社エスアイイー |
| 所在地 | 東京都千代田区神田松永町18 ビオレ秋葉原ビル3F |
| URL | https://www.networkacademy.jp/ |
| 業務内容 | 多くのITエンジニアを育成している、信頼と実績のITスクールの運営など |
| 従業員数 | 600名 |



「実際のプロジェクトを模したトレーニングコースで即戦力を養成するエスアイイー」

株式会社エスアイイーが運営する IT スクール、システムアーキテクチャナレッジは新宿、秋葉原にクラスルームを設けてネットワークや Linux、Java、PHP などの IT 技術に関する教育サービスを提供している。今回は教育事業を統括する執行役員の太田一成氏と、講師として教育の実践に当たる林口裕志氏にインタビューを行った。



クラスルームでインタビューを受ける太田氏（左）と林口氏（右）

株式会社エスアイイーの概要を教えてください。

太田：エスアイイーは 2004 年に設立され、17 年目を迎える IT 企業です。創業者がもともとネットワークエンジニアで、エンジニアとしての仕事と講師業を両立していたという経験を持っていたため、教育事業と SI 事業を同時に立ち上げたという経緯があります。事業としては教育の他にもソフトウェア開発を行う事

業部やメディア事業部、人材紹介を行っている事業部などもありますが、IT スクールで養成されたエンジニアがそのまま業務に参画したり、紹介を通じて就職をしたりという例もありますので、教育事業を起点に多方向へ拡大している企業となっています。

IT スクールに受講される受講生のプロフィールを紹介頂けますか？

太田：以前は全くの未経験の方が IT の仕事に就くために受講するという事が多かったのですが、今は未経験で IT の仕事に就く方も増えてきていますので、業界経験の浅いエンジニアが新しいテクノロジーを習得したり、スキルアップするために受講するというケースが増えたと思います。また新卒などの新入社員の研修としてもよく利用して頂いています。個人の意味で受講する人と企業からの要請に従って受講する人というのがだいたい半々くらいです。

スクールを運営する上でこだわっていることはありますか？

太田：一番大きなこだわりは、現役エンジニアが講師を務めるという部分ですね。これにはいくつかの理由があるんですが、何よりも IT は進化が早いので、講師としては常に最新の技術動向にも敏感でなければいけないと思うんです。講師が既に持っている技術を教育コースを通じて提供することだけをやっていると、最新情報を身をもって体験する、それを受講生に提供するというサイクルがなくなってしまう

んです。それを避けるためには講師が専任で授業だけをやっているのではなく、実際にシステム開発を行ったり、インフラやネットワークの設計をしたり、顧客と打ち合わせをするという現場の仕事が必要なんです。それを IT スクールの講義と並行しておこなうことで最新の情報を獲得できますし、リアルな IT エンジニアとしての経験を受講生に提供できると思っています。

講師が講師役だけではなくエンジニアとして現役で活躍しているというのは大きいですね。

太田：もう一つのこだわりは、現場で使える技術の習得を目指すという部分ですね。これはコンピュータの教育、特に LPIC のような試験に対応したコースを提供している企業としては相反する部分もあるんですが、試験に合格することだけを目指さないということです。勿論、試験に合格したい！と明確に目標を持っている受講生にはしっかりと取得までサポートしますが、悪い例を挙げると、試験問題を丸暗記して合格しても実際に IT の現場では使い物にならないなんていうことも起こり得ます。



林口：講師としては受講される方々はどういう目的を持っているのか？これまでの経験はどれくらいなのか？ということも1時間程度は面談して聞き出すようにしています。これは打ち解けた雰囲気を作るということも目的のひとつですが、何よりもその個人に合った授業内容にするためでもあるんです。

太田：うちの教育コースには架空のソフトウェア開発プロジェクトを請け負って、チームでの開発を疑似体験するというものもあります。これはR-PBL（リバースプロジェクトベースドラーニング）と呼ばれるコースでまさに試験対策コースとは正反対のもので、実際に複数の受講生がエンジニアとしてチームを構成して、例えば販売管理のシステムを実際に要求定義から仕様まで落としていって、コーディング、テスト、レビュー、リリースまでを行います。更に途中で講師が顧客役になって「新しい機能を追加してくれ」というような仕様変更を行うフェーズを組み込むことで、リアルなソフトウェア開発に近い体験ができます。これをやると実際のソフトウェア開発のプロジェクトに入っても、プロジェクトリーダーが何を指示しているのか、自分はチームの中で何をしているのか、ということを理解することができるんですね。これは私の前任者が始めた試みですが、自信を持ってお勧めできるコースです。

林口：私もお客さんと打ち合わせやインフラ構築やネットワーク構築のプロジェクトに入ることによって新しいことを知ることもできますし、そういう現場でしか知り得ないことって講義の中では非常に大事なポイントになったりするんですね。だから現場で働いてというのは講師としては重要です。講師同士でトラブルシューティングのコツを共有したりもできますし。

実際にチームを組むとなるとプログラミングはできてもコミュニケーションが得意じゃないエンジニアにとっては辛いのでは？

太田：その辺は講師がチーム編成に気を遣っている部分ですね。プログラミングや技術の理解が進んでいてコミュニケーションも上手いとプロジェクトリーダーとして活躍する可能性が高いんですが、それは実際の現場でも同じ状況

になる可能性が高いので、その人達としてみれば予行演習ですね。でも逆にあまりコミュニケーションが上手くない人に取ってプロジェクトリーダーをやらせてみて能力を伸ばすみたいな試みをすることもあります。それも全て現場での戦力になるということを講師も我々も目指しているからに他ならないんです。

林口：講義の中では講師が「これは試験にはこういう風に解答しないと不正解だけど、実際には別のやり方もあるよ」という感じで試験の先にあるものを見据えて教えるなんてこともありますね。



ラウンジでくつろぐ太田氏（左）と林口氏（右）

Linux は Cisco などのベンダーが開発する製品とは違ってコミュニティで開発が進んでいるソフトウェアですが、それに関しては抵抗はありませんでしたか？

太田：特にありませんでした。もう私が業界に入ったころから Linux はそういうものだと認識されていましたし、実際に何か問題があればソースコードを見ればわかる、必要であれば直すこともできるというのは、自由な生き方やあり方が求められるような今の時代にも合っている気がします。

LPIC の試験に対応したコースがありますが、LPI-Japan から LPI 日本支部の試験に移行する際に問題はありましたか？

太田：私は IT 業界のニュースをチェックするのが好きなのでその背景は理解していて、移行の対応も問題ありませんでした。ただお客さんから「LPIC はもう無くなって LINUX になっ

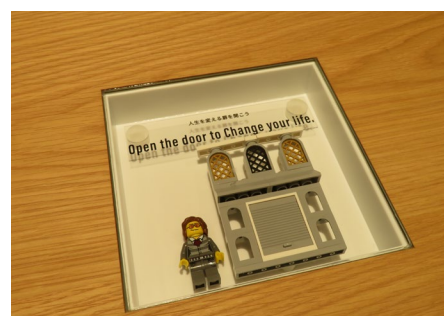
たんでしょ？」と言われること何度かありました。ですから、そういう時はちゃんとそれらの試験がどう違うのかを説明するようにしています。

最後に LPI 日本支部に対するリクエストはありますか？

太田：今のオンライン試験のシステムはだいぶ成熟していると思いますので特にリクエストはないですが、有るとすれば受講生の皆さんが慣れているこのクラスルームで試験を受けることができると良いとは思っています。

林口：実際に Linux を教えていて思うのは操作に必要なコマンドラインというのが今の Windows、Macintosh で育った人にはハードルが高いですね。なので講義の中では苦勞しています。試験の中でもコマンドラインがありますが、より現場の使い方に沿った試験内容になると良いなとは思っています。

試験への合格保証を謳いながらも現場での即戦力になることを目標に個人に柔軟に対応する少人数の教育コースは個人、企業の違いを超えて今、求められているスタイルだろう。今後、エスアイイーの IT スクールからどんなエンジニアが育っていくのか、期待したい。



「人生を変える扉を開こう」は教育事業部のモットー